



～お葬儀屋さんのひとりごと～

お骨壺のお話 ②

2. 骨壺の歴史

骨壺の歴史は、そもそも火葬後に入れる蔵骨器が骨壺にあたると思われますが、昔は火葬自体を万人が行っていたわけではありません。

6世紀後半から7世紀ごろにも火葬はあったようですが、特定の集団の葬法だったようで、8世紀ごろに一般化してきたといわれています。

古くは奈良時代から平安時代と思われる火葬墓が、18例発見されているということです。骨壺（蔵骨器）そのものも簡素な形態の容器だったそうです。

聖徳太子が誕生する前の古墳時代の6世紀、朝鮮半島の南西部にあった百濟（くだら）という国から仏教は日本に伝わり、その後中国からの仏教思想に影響を受けて火葬が発達してきたといわれています。

同じ時代の朝鮮半島では、押し型を前面に配した特色ある骨壺が使われていたということで、骨壺自体は須恵器（すえき）で作られていたそうです。

日本での火葬墓に納骨する方法としては、最も簡素なものでは骨壺を地中に埋めただけだったそうですが、木炭で囲われたものも発見されているそうです。遺跡を発掘して調査ということになるので、ある程度想像も入っていると思われますが、木炭の混じった層から瓦のようなもので囲まれた状態で骨壺が発見されているものもあったそうです。中にはかなり丁寧に埋葬されているものもあったようで、骨壺を外箱に石櫃に納めるようなものもあったそうです。

骨壺の材質も須恵器（すえき）、土師器（はじき）、木製、銅または金銅製のものがあったそうです。形状的には壺型、椀形、櫃型などがあったそうです。素焼の須恵器（すえき）および土師器（はじき）製の骨壺は、主に火葬用の骨壺として用いられていたそうです。奈良、平安時代では各地で用いられたそうです。

江戸時代になると、仏教の浄土宗が広まったことで極楽浄土思想が広まっていきました。

豪商は派手な葬儀と立派な墓石、一般人は土葬にしろ火葬にしろ簡素なものが多かったそうです。当時の日本全体ではまだ土葬が多く行われていましたが、火葬も広く行われるようになってきて、火葬した遺骨を骨壺や布袋に納めて埋葬した例が多かったようですが、それらに入れずに直接遺骨のみを埋葬したものもあったそうです。

骨壺も素焼の骨壺のほかに、陶磁器も用いられるようになり、骨壺用の陶磁器というよりは、あり合わせの容器を利用することもあったそうです。

はじめは遺骨を納める専用の壺ではなく土器が使用されていたそうですが、お釈迦様の遺骨や遺灰を納めた仏舎利が日本へ持ち込まれたことで、遺骨を美しい器に入れる考え方が広まり奈良時代には金銀で装飾された壺、中世には信楽焼、瀬戸焼と言った陶器が用いられるようになったそうです。

また、主に関西圏ではお骨の一部を本山に納める為の「分骨壺」の風習も生まれました。これは、京都・奈良を筆頭に神社仏閣が多く、なおかつ関西近隣に寺院の総本山が存在していることが関係していると考えられています。

「胴骨」は家のお墓へ「本骨」を本山に納骨しやすい環境が整っていたことが影響しています。

現在では、「終活」の一環として、生前ご自身が気に入った「骨壺」を購入するシニア層が増えているそうです。「マイ骨壺」とまで呼ばれるお骨壺を生前に購入される理由やメリットとして、ご自身が好まれる色や絵柄が入ったものをあらかじめ決めておけるためといわれています。

地域により異なりますが、お棺と違いずっと形が残る「お骨壺」は、やはりご自身が気に入ったものであってほしいと願う方が多いのかもしれません。

そんな要望に応えて最近では既製のお骨壺だけでなく、オリジナルの絵柄を注文し作成してくれるところや、購入するだけでなくご自身で陶芸教室に通われて骨壺を作ってしまう方もいらっしゃるそうです。

